

チェルノブイリに思いをよせて

# ポレーンエ



ポヒルチェンコ夫妻と三つ子たち  
後列は医師たち  
〈市立小児病院にて〉

エアメールに同封された、  
とってもかわいい三つ子の  
写真に大感激。ミルクキャ  
ンペーンに対する皆さまの  
ご協力に感謝いたします。  
(チェル救スタッフ一同)

## 命の粉ミルクをありがとう

私たち家族…1999年6月10日に生まれた、3人の小さな三つ子（イワン、サーシャ、パブrik）と私たち夫婦…は、私たちを支えてくださるすべての人々、特に「日本のチェルノブイリ救援・中部」と、私たちの子ども達のために上等なミルクを準備して下さる「移住基金」に対し、感謝の気持ちを表明したいと思います。

皆さまが、市立小児病院に贈ってくださり、私たちがいつも無償で受け取っている粉ミルク「プレミアム」がなければ、状況はとても困難です。私たちの子ども達が、健康ですこやかに育つようにミルクを与えてくださることに感謝いたします。

親切な心を持つすべての人々に、(私たちの)国を助け、特に私たちがこのような困難な時期に、小さな子ども達を助けてくださる人々に、心から感謝とお礼を申し上げます。

皆さまと皆さまのご家族に、大きな人間的な幸せと、豊かな生活、健康とご繁栄がもたらされますように。

ポヒルチェンコ家より  
特に私たちの子ども、

イワンとサーシャ、そしてパブロから

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:30~15:30)

E-メール：chachubu@muc.biglobe.ne.jp

## チェルノブイリへの挑戦

「移住基金」代表 V. キリチャンスキー



ウクライナ政府がチェルノブイリ原発の閉鎖を決定したことはすでにご存知でしょう。閉鎖の日は2000年12月15日。この日付が決まったことは、西側諸国の政治家たちに影響し、彼らは原発閉鎖に必要な資金を提供するという決定を下しました。喜ぶべきことなのですが、私たちは逆にふさぎこんでいます。その理由は次のようなものです。

約8億ドルの金額は、言うまでもなく、問題の解決にはなりません。「約束すなわち金」というわけではないのです。アメリカはかつて、ウクライナが核兵器を廃絶すれば援助すると約束しました。ウクライナは核弾頭ミサイルを廃絶しましたが、アメリカは単に約束を忘れてしまったのです。今回も全く同じことが起こるでしょう。原発は閉鎖され、しかし金はこない…。

現在、ロヴノ原発とフメリニツキー原発で、計2基の原子炉を完成させるための資金が必要とされています。まさにこれらの原子炉がチェルノブイリ原発閉鎖後、ウクライナに必要な電力を補うことになっているのです。しかしその資金は現段階ではありません。さらに、チェルノブイリ原発の閉鎖は、新しい「石棺」の建設を前提とします（その費用がいくらかかるのか誰も知りません）。放射性廃棄物の処理場の建設も必要。またチェルノブイリ原発を完全に廃炉にするまでの時間もかかります。そのほか、原発職員の町スラヴチチの問題もあります。彼ら全員が失業してしまうのですから、新たな職場となるべき企業が必要となります。

同時に、ウクライナ政府は、チェルノブイリ被災者の新たな概念を作り出そうとしています。国家予算から、いわゆる「チェルノブイリ基金」への資金割り当てをなくし、汚染地域の定義を改定して、その大部分を「非汚染ゾーン」と認める、という予定があります。事故が起こったとき、放射線のレベルは秘密にされました。人々を脅かさないためです。このようにして問題が解決されるのです。そして今、政府の決定によって、多くの村や町は「汚染されていない」と認められることになるのです。

チェルノブイリが人々に与えた影響について、学者たちの論争は続いています。罹病率の増加は、放射線の人体への影響とは関連がないと考える学者もいます。もちろん、結核罹病率の増加など、チェルノブイリに関係のない病気もあります。これらの病気は生活水準の低さ、低収入、まともな食事ができないこと、しかるべき住環境の欠如に関連しているのです。しかし甲状腺の病気については、放射線のレベルに直接関係のあることが証明されています。

全地域の汚染再測定のための資金が必要です。そうしてはじめて汚染地図を作成しなおし、正しい結論を下してはじめて、被災者や汚染地域の定義を再検討することができるでしょう。これらすべての問題は、資金不足によるものだという事は明らかです。しかし、そのために人々を苦しめるわけにはいきません。

以上から導かれる結論は、「チェルノブイリ原発の閉鎖とともに、問題はさらに増大する」ということです。その解決は国際社会からの支援によってのみ可能です。ウクライナの人々は、国際社会が日本国民の方々の方々のようであってくれればと神に祈っています。先進諸国のすべてが「チェルノブイリ救援・中部」の援助のたとえ半分ずつでも援助をするようになれば、私たちは将来を憂えずにすむことでしょう。

ウクライナ国ジトーミル市にて 2000年7月

## 親愛なる日本のお友達！〈奨学生からの手紙〉

レーシャ・テレシユク



私はジトーミル市の教育大学の初等教育学部で学んでおり、将来、小学校1年生から4年生を教える先生になります。そのためには多くの事—文学・言語・絵画・歌唱・芸術などを学ばなければなりません。これは大変なことですが、私は勉強がとても好きですからオール5を取っています。ちょうど今、2年生を終えるところです。

私の家は5人家族です。それに祖母もいます。私達が祖母の面倒を見、祖母は自分の年金から私達に金銭的な援助をしてくれています。けれども私が皆様の奨学金を受けるようになってからは、私の家族は前よりらくになりました。父はコンバインの運転手です。一生懸命働いていますが、いつも給料を払ってもらえません。母は村の診療所の看護婦をしています。

私達の村はマチーキ村といひます。ナロジチから15キロのところでは、隣には移住者たちの新シャルナ村と、旧シャルナ村があります。でもそれらの村には誰も住んでいません。私達の村は居住可能と見なされていますが、多くの人が病気で、周囲の森は放射能が高いのですが、皆そこで、きのこや木の実をとって食用にしています。

私をはじめ、オクサーナとマリーという妹たちも健康に問題があります。甲状腺肥大です。本当のところ、今、私は健康状態が少し良くなりました。村ではなくジトーミルに住んでいるからです。でも大学を卒業したら自分の村に帰って、その小学校で働くことになっています。

村の人達は良い人達なのに、どうも彼らの心に“チェルノブイリ”が棲み着いてしまったように思えます。ウクライナ人は生まれつき楽観主義者です。だから私達は、将来いつかは生活が良くなるだろう、放射能で病気になることはないだろうと信じているのです。それなのに村に帰ると、大人も子どもも病気にかかっている、給料を払ってもらえないなどとママから聞かされるのです。心の中に憂うつがいつも居座ります。

私達の国は未熟で今は生成期だから、多くの問題、特に経済に問題を抱えているのだということも私も理解しています。“それをやっつけ

たいがために、我々はいつもわざと困難にぶつかるのだ”という冗談さえあります。でもそうではなくて、人々が困難なことに慣れてしまい、それと戦おうとしないことがしばしばあることが問題な

のです。これは人々の心理に悪い影響を及ぼします。破滅してしまう者もいます。

こちらでは、原子力発電所の閉鎖について多くのことが言われています。しかし閉鎖を信じていない人達もいます。彼らは、閉鎖することは今の発電所を運転するよりも、もっとお金のかかることだと理解しています。つまり、医療費や補助金を支払うほうが安上がりだろうと言うのです。

ジトーミルでは、学生の友達と一緒に、まったく違った雰囲気の中にいます。楽しい生活です。勉強したり、息抜きしたり、コンサートに行ったり、小話クラブで演じたりで、深刻な問題について話すことはありません。でも村に帰ると、まるで違う世界に落ちこんでしまって、そこには別の秩序に支配される、別の環境があるのです。それはチェルノブイリの影響です。それは私を不安にさせます。

私達の苦難や困難な問題を、自分のことのように思っている心ある人々がいることは素晴らしいことです。私が言おうとしているのは、チェルノブイリ救援・中部と移住基金のことです。私達奨学生は移住基金に行くと、なぜか心が安らぎます。そして必ず日本のお友達がどうしておられるかと尋ねます。いろんなニュースを聞きたがります。自分達の勉強の様子を話して、助言を求めます。私は村の我が家に電話することも許されます。移住基金に感謝しています。

私の両親は、チェルノブイリ救援・中部の皆様に、大きなご支援と奨学金を、心から感謝していることをお伝えするようにと申しておりました。皆様のご支援によって、大学を無事に卒業できると、私は思っています。どうもありがとうございます。さようなら。

敬意をこめて。

2000.5.29

## 本年度通常総会開かれる

6月3日1時半から名古屋駅前の愛知県中小企業センター会議室で、特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部の通常総会が開かれました。法人化後初の総会です。正会員総数90名中、書面出席を含め59名が出席し、99年度の事業報告と決算を承認しました。99年度は法人としての活動の実体がなかったので、いずれもまったく形式的なもので、質疑もなく、30分足らずで終了しました。



総会の後に2月のウクライナ訪問団の報告会と茶話会スタイルの交流会があり、こちらは大いに盛り上がりました。来年からは、

☆総会の日取りを3月に決め、『ポレーシェ』で広報しておく。

☆総会の日を「チェル救デー」として色々なイベントを行い、その合間に総会を行う。

というやり方を検討することになっています。

なお、総会に出席されなかった正会員の方々については、現在、今年度の会員登録を行っています。早めに登録をお願いします。  
(田中)

## 4WD車をウクライナへ贈ろうキャンペーン続行中!

先号のポレーシェでこのキャンペーンを呼びかけたところ、記事を目にした日経新聞の記者Sさんから電話が入った。「やった! 4WD獲得に一步近づける」と直感し、電話に飛びついた。話をしながら、なんとか直接会って話ができないかと思った。おりしも6月19日、東京でカタログハウス主催のチェルノブイリ救援関係グループの会議があり、そこへ行くことになっていた。このタイミングを逃す手はない。早速、直接取材をしてほしいとお願いした。快諾。



1台の4WD車がパトロールすることによって、年間500~600回も起こるといふ森林火災を少しでも事前に食い止めることができれば、若い消防士や、事故処理業者で今なお現役の消防士達の新たなヒバクを減らすことができるのだ。なんと少しでも贈りたい。そのことが記事(右上)になり、それを読まれた京都の男性からファックスが届いた。悪路をよく走る4WDとのこと。ただ問題がひとつあった。その車は11年乗ったものだといふ。ウクライナからは5年以内の中古車でないと国内へは持ち込めないと伝えてきていた。しかしあの国は法律がころころと変わる。「もしかしたら…」と思い、早速事務局長に現地へ問い合わせてもらった。「やっぱり」…5年から8年に変わったといふ。勘は当たった。が、11年ではウクライナの税関の高いハードルは越えられない。残念ながらこの申し出はお断りするしかなかった。

来年の春には、また火災が頻発する。放射能にまみれるが、消防士達はその現場へと向かう。私には、汚染地ナロジチの若い消防署長の顔が浮かぶ。両親もおじいさんも「チェルノブイリ」の後、ガンになったと話してくれた。その彼は、火災が起きれば真っ先に現場へ向かうだろう。そして、ヒバクする…。これ以上チェルノブイリの被害を増やしてはならない。

皆様のご協力を切にお願いいたします。

(山盛)

## チェルノブイリの子ども達の絵画展とクリスマスカード作り

日時：8月20日（日）午後1時～4時

場所：一宮スポーツ文化センター2F 第3展示室

一宮市真清田一丁目2-30 Tel0586-24-1881

夏休みにクリスマスカード作り!?! ちょっと早すぎない?とお考えの方もありませんが…。十月のウクライナ訪問団に託す前に、郵便局等でのカード展示を考えています。ジトミルでも沢山のの方々に見てもらえるといいですね。

皆様のご協力で使用済み切手は4000枚近く集まり、糊はがしと種類分けに汗だくの毎日です。6月に開かれた私学のフェスティバルで、展示会とカード作りをしたところ、小学生やお母さん、若者達から高校の先生までカード作りに夢中になりました。わいわいがやがやとっても楽しいですよ。あなたも是非ご参加ください。

会場準備の都合がありますので、できるだけお申し込みください。

チェルノブイリ救援・一宮つぼみを守る会

一宮市今伊勢町宮後字西茶原62-5 中島しぐれ方(0586-46-0263)

## 長良養護学校児童生徒会新聞(第1号H12.7.19)から抜粋

最初は、学校のテーマをきめました。でも、あんまり意見を出すことができずさんねんでした。あいさつ運動では、みんなに聞こえるように、ぼくとしては大きな声であいさつができました。

ふれあいの日に行われた募金のときは、「華ちゃんの募金」と「チェルノブイリの募金」をやりました。「募金おねがいします。」と言って、大きな声は、なかなかだせれないんだと思いました。でも募金がいっぱいたまったのでよかったです。(中学部3年 信田滋弘)

## 七夕まつり in 杜の家(7月8日/土)のバザーに参加しました!

身体障害者療護施設「杜の家」(名古屋市名東区梅森坂)は、地域に根ざす施設になることを目指しており、このイベントもそのひとつとして開催されました。施設内を開放し模擬店やバザーが行われました。施設関係者はもちろん近隣の方達にもPRし、若松親方や今井龍弥医師の講演会、大治太鼓の皆さんを招いたこともあり、たいへんな賑わいでした。救援・名古屋もバザーブースを開き、ウクライナ民芸品やウォッカの試飲販売を行ったところ、見事完売となりました。

ジトミルから持ち帰ったアントニークさんお勧めのウォッカは、白樺の芽のエキス入りのアロマティックなウォッカで、なかなか美味しいと評判でした。(美)



多くの人が訪れた祭り会場＝名東区梅森坂の身体障害者療護施設「杜の家」で

# 忍び寄る放射能の恐怖

—辰野町モナザイト放置事件—

南箕輪村 原 富男

「降って湧いた」けど、本当は「運ばれて放置された」訳の解らない怪物。それがモナザイトである。長野県辰野町にモナザイト15トンが放置されていることを知ったのは、6月14日であった。面倒なことから「ひたすら逃げ」、「植木等」のように無責任に生きる事を身上にしている僕のまえに、厄介な問題が「降って湧いた」のだ。



よせばいいのに「R-DAN信州」の三輪浩さんからの放射線量測定の話に乗って、現地（我が家から車で20分）を案内し、測定までしてしまった。

モナザイトの保管されている民家の周囲を測定してみると、放射線量は空間で  $0.11 \sim 1.76 \mu\text{Sv}/\text{時}$ 、地面では  $0.14 \sim 2.54 \mu\text{Sv}$ （通常  $0.08 \mu\text{Sv}$ ）だった。最高値は通常の31倍。ウクライナの汚染地「ナロジチ」と同レベルの線量であり、僕は「びびって」しまった。これは「只事ではない」。さっそく河田さんに連絡し、再測定して、「モナザイトが敷地内にも散乱している」ことを確信し新聞に公表した。後日、科学技術庁もこの地点を測定し、2カ所にモナザイトが落ちていることを確認した。奥の地点では、自然界の300倍以上の  $30 \mu\text{Sv}$  という高い値が測定され、表土を削り取る措置が取られた。

民家内部に放置された15トンのモナザイトの放射線量は、 $0.1$  ミリ  $\text{Sv}$ （= $100 \mu\text{Sv}$ ）であり、自然放射能の1000倍以上になる。この線量は、チェルノブイリ原発の石棺から100m地点の値（ $20 \sim 60 \mu\text{Sv}$ ）よりもはるかに高い。

科技庁は、モナザイトが保管されていることが判った6月12日、民家周辺の放射線量を測っただけで「人体に影響はない」と発表した。その直後に敷地内でモナザイトが発見されたことについて、「地面の測定は行わなかったから」と弁明している。十分な測定をしないまま「安全宣言」をしたのである。こんなことなら俺だって科技庁になれる。

僕はこの一件で科技庁に不信感を持った。6月24日、僕の住む南箕輪村を「高圧送電線」の集会で訪れた京都大学の荻野晃也さんに、現地を見てもらった。荻野さんは「一番恐ろしいのは、モナザイトに含まれる放射性元素のトリウムやウランが崩壊して空気中に出る、希ガスのトロンやラドン。これは空気中の埃に付着し、肺に吸い込むと体内被曝する恐れがある。民家全体をビニールシートで覆う応急措置が必要」と指摘した。

実はその前日、科技庁はガンマ線だけでなく希ガスの測定も行っている。僕はその測定結果を公表するよう、科技庁に電話した。すると「希ガスの測定はしていない」と言う。「本当は測定しているでしょう」と粘ると、ようやく「測定はしてます。27日に公表します」と答えた。しかし結局、測定結果が出たのは再三の電話の末、10日過ぎた7月7日であった。トロン・ラドンの測定結果について科技庁は「通常レベル」としているが、「測定結果が高かったからこそ、民家内のモナザイトの上に鉄板や土嚢を被せた」というのが真相であろう。

辰野町では科技庁が安易に「人体に影響がない」と宣言してしまった為に、様々な問題が起きている。僕が先ず驚いたのは、4月1日に搬入されてから6月23日までの約3ヶ月間、モナザイトが保管されている民家の周りには立入禁止のロープさえ張られず、警備の警察官がモナザイトの落ちていた地点に立っていたことである。また夜間警備の

警察官は、15 トンのモナザイトから数メートルの距離にある敷地内の駐車場に車を止め、車内で不寝番をしていた。僕はチェルノブイリの消防士や警官の被曝を思い、測定をしながら、警察官に放射能の危険性を説く羽目になった。安易な安全宣言が被曝を生む証左である。

モナザイトの盗難や、保管されている民家の火災も心配だ。今なお、火災現場で被曝しているウクライナの消防士を思う。火災が起きた場合に想定される放射能の被害は甚大であり、それに備えた警備が今もってなされていないことを指摘しておきたい。

また、民家の周辺は住宅地である。周辺住民の不安を払拭するため、町は説明会や血液検査を実施した。しかし、説明会では科技庁の受売りで「人体に影響はない」と繰り返すばかり。血液検査も、放射能を大量に浴びなければ血液反応は出ない。

町長は6月30日、町に「モナザイト特別対策委員会」を設けるとともに、科技庁に対しモナザイトの撤去を要請した。しかし科技庁は、「所有者に防護板の設置等を指導したが改善されず、所有者に管理能力がない。周辺に住宅もあり、保管場所として好ましくない。原子炉等規制法の管理基準も満たしにくい」として、辰野町の中での移転先の検討を町に求めた。

町は保管されている民家所在地の北大出区に対し、「町内の他区で用地を探すのは難しい」として、共有地の山林などへの暫定的移転を検討するよう提案した。区は代議委員会で暫定保管を決議し、区民に理解を求めていくとしている。これに対し住民からは「現在の場所よりは山林のほうがいいが、所有者が撤去できないとき、既成事実として区に半永久的に置かれるのも困る」と不安の声が出ている。

科技庁が町に、町は区に…。強者から弱者へ順番に無理難題を押しつけた結果が「暫定保管」にほかならない。本来、安全に管理すべき所有者が管理できなければ、それを放置した科技庁が責任をもって撤去するのが筋である。町長は、「来年3月を期限としての暫定保管」を科技庁に要請したが、同庁は、いまだに暫定保管の期限と期限後の撤去を明言していない。

人形峠のウラン採掘残土放置等の問題を見るまでもなく、科技庁の暫定保管は「暫定の暫定＝永久保管」になりかねない。このままでは、全国に散在するモナザイトによって「暫定保管の山」が作られかねないのだ。

最後に、国および科技庁の姿勢について、問題点を整理しておきたい。

- ①(財)日本母性文化協会によってモナザイトが精製されてから20年間、これを「放置」したこと。
- ②今年4月、千葉県市川市の運輸会社の倉庫に、約10トンのモナザイトが一時的に保管されていたことを把握しながら、追跡調査をしなかったこと。
- ③所有者である同財団理事長・池田弘氏に対し、原子炉等規制法による保管場所の届出指導の前に、まず安全な場所への保管を指導すべきであった。なぜ科技庁は池田氏をここまでかばうのか？
- ④精製・運搬・保管等にかかわった作業員などの被曝調査が行われていないこと。
- ⑤辰野町で、保管場所建物外部に落下しているモナザイトを見過ごし、いまだその除去が不十分であること。
- ⑥空气中に放出された希ガスのトロン・ラドンの測定前に「安全宣言」を出したこと。
- ⑦この事件の責任は所有者と科技庁にある。暫定保管をやめ二者の責任で撤去すべき。
- ⑧重大事件にもかかわらず、池田氏に刑事責任を問わない警察の対応は異常である。

モナザイトを一日でも早く撤去するため、ここしばらくは忙しい日々になりそうです。それにしてもチェルノブイリがウクライナから直輸入した放射線測定器「シンテック」(1万円/台…好評発売中)は役に立ちます。(追跡調査は続く…)

## 竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部 キエフ在住 竹内高明)  
(2000.7.7)

6月16日から27日まで「ジュノーの会」の代表団がキエフとチェルニコフに滞在し、私は通訳の手伝いをしてお金をかせぎ(1日100ドル)ました…が、滞在中、代表団に予定外の出費があったため、私の通訳料は「おあずけ」

となりました。「救援・中部の代表団が9月か10月に来るらしいので、それに託してほしい」と頼んでおきましたが。

私の仕事は、社会学の舟橋先生の被災者聞き取り調査の通訳が主でした。その対象は以下の通り。

### A. プリピャチから疎開した人たち

#### (1) チェルノブイリ原発職員

① 事故時原発で働いており、事故直後4号炉に入ってモスクワの病院に運ばれ右足を切断した人

② 事故後も原発で働いていた、あるいは事故処理作業に従事した人たち

(2) チェルノブイリ原発職員の家族(「ポレーシェ」57号に紹介されたホデムチュク氏の奥さん、ナターリヤ<ナターシャ>さんにも会いました)

(3) プリピャチの工場、学校、文化会館の職員だった人たち

(4) プリピャチ近郊の村に住み、プリピャチの学校に通っていた人(事故当日も通学した)

B. ウクライナの他の原発(フメリニツキー原発)で働いていたが、事故後志願して(上司の反対をふりきって)夫人と共に現地に入り事故処理作業に参加、その後「石棺」内部の点検作業を5年続けた人

C. チェルニゴフ州の汚染区域(「放射線生態学管理区域」。いわゆる第4ゾーン)に事故以前から住み続けている人たち

これら被災者は多かれ少なかれ何らかの病気を抱えており、しかも経済的に苦しいため高価な薬は買えないという状況で、アパートの家賃・公共料金を滞納せざるを得ないという人もありました。今回初めて耳にした話は、障害者の認定をうけるのにワイロが必要ということで(ここ数年来の悪習ということですが)、2級障害者なら1000ドル(!)ほどということです。告発はしないのかという問いに対する答えは、人が変わっても悪習は残る、社会全体にはびこっているから…というあきらめムードのもの。Cの汚染区域の村では、コルホーズの給料が4年前から出でおらず、食料は自給自足、自宅で飼っている牛の乳を売って現金収入にするという話で、地区病院にも予算がないので救急車のガソリン代は患者持ち、地区病院に行く足代にも事欠くという状態でした。もっとも土地自体の汚染を除けば、このような経済的困難はおそらくウクライナ全土の農村をおそっているものと推測されます。「お子さんやお孫さんの健康を考えて、引っ越そうとは思われませんか」という問いには「どこへ行けばいいっていうんですか」という答え。もちろん、引っ越せるものならとっくの昔に引っ越していたでしょう。

現在、私は大学の夏休みに入り、やっと毎日おちついて机に向かう時間ができたところです。日本ではいちばん蒸し暑い頃かと思いますが、どうぞお体大切に。



お仕事中の竹内さん(中央)



チェルノブイリをテーマにした記録文学は、発電所オペレーターたちについて、彼らの行動に対する非難や冷たい差別というまちがった伝説を作り出してしまった。しかし、彼らは死をもたらす原子の息づかいを最初に感じ、自ら英雄的な寛大さを示した人々であった。

核の打撃を最初に受けたのは、中央建屋にいたオペレーター達である。全職員は完全な真つ暗闇の中ですべての配電盤を遮断し、防護カバーで覆った。そうしなければ後から来た消防士達は全員感電で死亡しただろう。彼らは自分たちが異常に高い放射線レベルの中で働いていることを自覚していた。なぜならすでに倦怠、失明、嘔吐など急性放射線障害の諸症状を感じていたから。爆発はたとえ職員による許容範囲内の過失がなかったとしても起こり得た。この事故では、低出力ほど安全と一般に考えられていた主張とは逆に、あらゆる欠陥が表面化した。運転当直主任の O.アキモフは事故当初から 1996 年 5 月 11 日モスクワの病院で完全な死を遂げるまで「私は何もかも正しく行った。どうしてこのようになったのか分からない」と繰り返していた・・・。

(実験終了後原子炉を止めるために) 緊急停止ボタン AZ5 を押した瞬間、発電機指示目盛盤が恐ろしく輝いた。熟練したオペレーター達ですらこの瞬間心臓が押しつぶされそうだった。炉心内部ではすでに崩壊が始まっていたが、まだ爆発はない・・・その瞬間まであと 20 秒・・・。

その時刻、4 号炉に居たのは当直主任の O.アキモフ、上級技師の L.トプトノフ、技師長代理の A.デイヤトロフら 14 名である。まさにこの時刻に、原子炉系当直主任の V.ペレボズチエンコが中央建屋の使用済み燃料プールや燃料交換機を見た後、5 コペイカと呼ばれる直径 15m の炉心上部にいた。突然彼はびくっと身震いした。繰り返し激しく起こる水の圧力で 350Kg の燃料カセットが上方に飛び跳ね始めた。まるで 1700 人の人が次々に帽子を上を放り始めたかのようなようだった。全体がざわめき揺れ始めた。足下ではすでにごうごうたる破壊が進行していた。彼は廊下に飛び出した。その時、主循環ポンプ建屋の向こうでエンジニアの V.ホデムチュクが働いていた。彼はポンプの振動をペレボズチエンコに伝えようとした。その瞬間に爆発が勃発した・・・ある目撃者の証言によれば、2 回爆発音がしたというが、3 回かそれ以上だっ

たという証言もある。爆風は主循環ポンプの建屋を右へ左へと破壊した。そのうちの一つはホデムチュクの墓になった。

1 時 23 分 58 秒。主任のアキモフは制御盤のそばにいた。給水装置の制御盤のそばには年輩の技師 B. ストリアチョクが居た。原子炉操作パネルの表示盤は水がない! と知らせていた。アキモフは負荷率の電流計を見た。針はゼロのあたりで振れていた。――爆発した! 彼は心臓が止まりそうだった。しかし再び精神を集中した。――水を補給しなければならぬ・・・その瞬間、あらゆる方向から、上からも下からも恐ろしい衝撃があり、途方もない爆発が起こって炉は陥落した。すべての明かりは消えた。起こったのだ。しかし彼らはまだ真実の全容を知らなかった。何とか事態を收拾したいと望んだ。人々はその時、死のゾーンで核の力と闘っていた。タービン建屋の放射能値は毎時 500~1500 レントゲンである。その夜、タービン技師達は偉業を成し遂げた。でなかったら、火災はタービン建屋全体に内側から広がり屋根は落ち、火は他の原子炉建屋に移っただろう。破壊が 4 つの原子炉を襲っていたら何が起こったか、想像もつかない。悲劇の状況の全体を理解した V. ペレボズチエンコも致死線量を受けた。彼はアキモフに云った「原子炉は壊れた。人々を助けなければならない」。彼らは勇気と義務感から罹災した仲間を探しに自ら地獄へと向かった。

ウクライナの大地がホデムチュク、シャシエノク、レチエンコらを受け取った。モスクワ郊外のムテインシキー墓地にはすでに 20 の墓穴が出現した。オペレーター、電気技師、修理工・・・その中には女性も二人いる。二人は武装警備隊員だった。その夜当直に当たっていて、一人は 4 号炉向かいの守衛所に、もう一人は使用済み燃料置き場にいた。

運命だろうか。ハリコフの振動調整工の H. ポポフはなぜよりによってその夜発電所に来なければならなかったのか。事故直後、彼は現場を放棄する事も出来た。しかし彼はそうしなかった。彼はタービン技師達に手伝い火災を消し止めた。

死は我々の中からより良い人々を選ぶ、というのがその通りだ。

(ウクライナ語訳 河田いこひ)

チェルノブイリ奨学生たちの  
『あしながおじさん』(TKさん)



15才で終戦になりました。中学2年の時から学徒動員で、学校で勉強などしておれなくて工場で働かされていました。名古屋大空襲のときは、南区で勤労奉仕していましたが、18人も学友が亡くなりました。防空ごうの中で窒息死したので、皆きれいな顔をしていました。今でも忘れられません。

まだ燃えくすぶっている町の中を歩いて、自分の家まで帰りました。名古屋城が爆撃された同じ日に私の家も焼けました。戦争が終わったら、もう落ち着いて勉強する気にもならなくて、ぶらぶら遊んだり、ちょっとした金儲けなんかしていましたが、「これではいかん」と考え直して定時制高校に入りました。ここでも遊んでばかりいたけど卒業させてくれました。こんな私とは違って、戦後、一生懸命に勉強した同世代の人達が日本を復興させ、繁栄させてくれました。高校卒業後は、商売を始めました。何度か失敗もありましたが、最終的には、建築関係の仕事に落ち着いて、娘二人に大学を卒業させました。子どもや孫、若い人たちには、自分のような中途半端な教育ではいけないとの思いからで、これで親の務めは終わったようなものです。

チェルノブイリ原発事故を知ると、自分の戦時中のあの地獄のような体験と、この事故の被災者たちの苦しみがひとつにつながりました。自分にできることを考えながら、「とどけウクライナへ」が出たとき、本屋で買って読みました。「わたしたちの涙で雪だるまがとけた」も読みました。

去年、チェルノブイリ救援・中部のウクライナ講座にたまたま出たとき、チェルノブイリ奨学金のことを聞いて、「これだ」と思い、それからずっと協力させてもらっています。前にも言いましたように、戦後の日本の繁栄のもとには教育でした。これからの日本を良くするのも教育だし、若い人たちが教育をうけられることが大事で、そのために老年配者たちは将来への捨て石にならなければいけないとも思っています。

ウクライナの現状は混乱していますが、一生懸命に勉強している学生たちがいる。志を持ち学力優秀な学生が、資力がないために進学できないでいるとしたら放ってはおけません。私にできる精一杯のことをしたいと思っていますのです。

まじめに勉強する学生がいる限り、ウクライナは立ち直って行くでしょう。経済もきっと良くなって行くでしょう。(談)

「チェルノブイリ奨学基金」は今、今年度の奨学生を選考するため、「日ーウ」の情報交換を活発に進めています。候補にあがっている生徒達は、たとえば「医学学校を優秀な成績で卒業し、医科大学を目指して猛勉強中」であったり、「先生になりたい。でも、奨学金が受けられないなら、他の仕事を探さなくては…」等、祈る気持ちでその決定を待っています。

いずれにせよ、今年度の予算(総額 約 12,000ドル)の枠内で、医科大学生・教育大学生あわせて10名前後を選考していくこととなります。「あしながおじさん」「あしながおねえさん」の輪がどんどん広がっていくことを願っています。(J)

## 2000年度 ボラ貯交付金 総額 2,843千円 に決定！！

先号(57号)で、配分決定前夜の状況をお知らせしましたが、決定額はやはり厳しいものになりました。(しかし、1992年に申請をするようになってから、連続9回目の交付決定となり、これは快挙です。) 決定内容は、以下のとおりです。

① 医療機器購入費(市立小児病院へ甲状腺プローブを1台)	504千円
② 医療機器のメンテナンス費(部品・消耗品一式)	400千円
③ 医薬品購入費(州立小児病院・ゼレムリヤ診療所・ブルシーロフ病院)	1,939千円
総 額	2,843千円

お気づきのように、州立小児病院向けの保育器購入費は、0円査定となりました。(審査員に、保育器の重要性・保育器と放射能被曝との因果関係について、十分、理解していただけなかったようです。)

しかし、皆様からのカンパは着実に増加していますので、「自力で3台(約250万円分)贈る」という方針を、7月14日の運営委員会で決定しました。

それから、②のメンテナンス指導を行うため、専門家として(すでに皆様ご存知の)北野達也臨床工学技士を派遣する予定も盛り込むなど、自己資金と交付金をあわせて、およそ660万円あまりの事業となります。今後とも、ご支援をお願いいたします。

【以下は、独り言です。】…それにしても、この「超低金利政策」は、明らかに大銀行救済のための許しがたい悪政だ。(バブル時代にお金を貸しまくり、地上げ屋を総動員してボロ儲けし、バブル崩壊と同時に焦げついたお金を、預金者の利息で穴埋めしてしまおうという暴挙。) 私は怒っている。(J)

### 読者の声

\*いつも楽しく拝読させていただいております。発足して10年ということですが、私自身もこの10年の間に、学生から社会人、そして母親へと取り巻く環境はずいぶん変化しました。今は、幼い子どもを抱えて、活動にはあまり協力できませんが、かげながら応援させていただきます。「ポレーシェ」が、私とチェル救、そしてウクライナの未だに苦しんでいらっしゃる人々をつなぐ架け橋になっています。(春日井市 M.I.さん)

\*57号の「石棺に閉じこめられた我が子への手紙」の写真集「その星の名はにかよもぎ」は、どこの出版社から出ていますか?次号で教えてください。(枚方市 S.A.さん)  
⇒残念ながら、日本では出版されていません。しかし、今号のP9で紹介した写真集「チェルノブイリの火」も同様ですが、写真はとても見ごたえがありますので、閲覧のご希望があれば、事務局までお問い合わせください。(編集部)

\*今回のポレーシェは、とても見ごたえがありました。皆さんの想いがひしひしと伝わります。送金することしかできませんが、このような形でも参加できることをうれしく思っています。がんばってください。未来の子ども達のために!(岐阜県 J.T.さん)

\*「原子力防災・自主避難訓練の報告」をはじめ、他では得られない貴重な情報、いつものように興味深く読ませていただきました。「篠原さん逝く」の記事・写真と、編集後記の「9ページの続き」、衝撃的でした。「石棺に閉じこめられた我が子への手紙」、読んでいて、涙がこぼれるのを抑えることができませんでした。事務局便りの「物忘れ自慢」、とても共感してしまいます。…(枚方市 A.T.さん)

## 事務局便り

### ☆今年も「クリスマスカード」を贈ります！

12月には『チェルノブイリの子ども達へ贈るクリスマスカード』をウクライナに送り出す予定です。ご家庭で、職場で、学校で早めに取り組み、たくさん作っていただくとありがたいです。担当のグループは未定ですが、とりあえず事務局に送ってください。

### ☆恒例の「ミルク代のカンパ」を受付中！ 同封の郵便振替用紙をご利用ください。

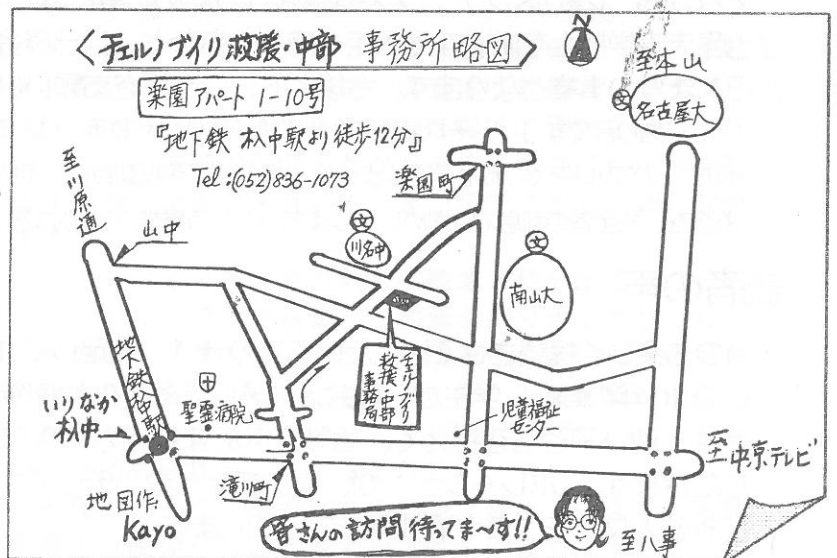
### ☆「イベントのボランティア募集！」 特に車をお持ちの方、お待ちしております。

### ☆「フロム・エー効果！」

若いボランティア事務局に来たる！

先号の事務局便りで、“局員の老化現象”とも誤解されかねないジョーク溢れる記述があったために、親身なご忠告まで戴きました。心からお礼を申し上げます。

さてそんな折に「アルバイト・就職情報誌のフロム・エー」がボランティア募集の欄に「支援・中部」を取り上げてくれました。これを見た何人かの方が応募してくださり、さっそくパソコン・翻訳・手紙書きなどのボランティアをされています。名古屋大学のTさんも、ホームページ作りに4月からずっと来てくださっています。事務局ばかりでなく、「救援・中部」そのものが若返っていくような嬉しい現象です。この若いエネルギーが救援活動に定着してくれる事を願っています。(松田)



## 編集後記

- とても本気とは思えないが、「東京に原発を！」と「電事連」が真剣に検討すると言う。一日も早く、具体的な実施計画を発表してもらいたい。(都会人の反応が楽しみである。)それとも、危険を悟り、断念することになるのか？(こんどは、原発のある過疎地の人々が黙ってはいまい。)どちらにしても、面白いことになったものだ。(J)
- 夏は嫌いだ。蚊に刺されるし、ゴキブリは出るし、年はとるし(夏生まれ)、おまけに買ったばかりのパソコンがポーシェ編集集中に壊れるし…。ナツハキライダ。(かよ)
- あー(極寒の)ロンドン…。現地の方には申し訳ないが、一週間くらい滞在して、この熱中症を何とかしたい。一瞬でいいから「どこでもドア」で行ってみたい。(美)
- 一週間ばかり山のほうへ、学校の研修に行った。涼しいと思って喜んで出かけたのに、あんまり代わり映えしなかった。どーいうこと？(あ)
- 「ねばならない…」「しなくちゃ…」という生きる姿勢が、背骨を壊した。しばしうめいで…そうか、私、もう少し軽く、したいことをして生きたいんだ。(京)